～～～

対面リーディングと私

対面リーディングボランティア　岡崎（おかざき）　節子（せつこ）

対面リーディングのボランティアをさせていただいて３年目になります。もともと本が好きで朗読も好きでしたので、退職したら絵本の読み聞かせや音訳のボランティアをやりたいと思っていました。音訳ボランティア養成講習会２を終えた後、講習会３の講座が始まるまで半年ありましたので、できることなら少しでも早くボランティアを始めたいと思い、対面リーディングの基礎講座を受講しました。

ライトハウスの対面リーディングは初見で行うとお聞きした時は、どのような本を読むのか、読めるのかと不安でした。洋書で歴史的な内容の本のご依頼を受けた際は、予備知識もなく単語も難しくて自信がありませんでしたので、職員の方のお手を煩わせて、あらかじめ予想されるページをコピーしていただいたこともありました。しかし最近は、難しい言葉は利用者さんに待っていただいて調べたり、利用者さんに教えていただいたりしながらやっています。「えっ？」と聞き返されて自分の間違いに気づくこともあり、とても勉強になります。

対面リーディングでは、自分では読まないようなジャンルの本に出会えます。ある時は実用書、ある時はハードボイルド、またある時はノンフィクション。利用者さんが持参される本に興味をひかれて、本のタイトルをメモして帰ることもあります。本の内容や作者について利用者さんとお話しながら、知識を広め自分自身の読書の幅を広めることができるのは、大きな楽しみです。

音訳では利用者さんがわかりやすいように読むことが大切とご指導いただきますが、一人マイクに向かっていると、ともすれば自分と本だけの世界に入り込みがちになります。対面リーディングでは目の前に利用者さんがいらっしゃいますから、声の大きさや高さは適当か、スピードは早すぎないか、意味のわかる読みができているかと、時には「これでいいですか？」と尋ねたりして、利用者さんの反応に気をつけながら読み進めることができます。聞いている間にウトウトされることもあるのですが、そのような時は、私の読み方や声やスピードが単調だったかなと反省しています。このような利用者さんを前にしての音読の経験は、マイクに向かって音訳をする時に大変役立っています。

このように、対面リーディングは私にとって、学ぶことのとても多い経験です。これからも、利用者さんにわかりやすい読みを心がけつつ、楽しみながら続けさせていただきたいと思っています。

いちじく発祥の地　かわにし

サービス部　図書貸出担当　河上（かわかみ）　泰子（やすこ）

私は大阪で生まれ育ち、現在兵庫県川西市に暮らして18年になります。生まれは大阪ですが今では川西に帰るとホッとします。

ホッとする理由のひとつが川西産いちじくです。
毎年8月～10月頃早朝、かご持参で近所のいちじく畑へ行き、農家直売いちじくを購入するのが楽しみです。店舗で購入するのとは違い、小ぶりですが新鮮で甘く、何といってもおまけして下さるのが嬉しいのです。
近所に直売所がありラッキー！と思っていた私ですが、ある時ニュースで川西のいちじく畑が映り驚きました。

兵庫県のいちじく収穫量は全国で第3位、県下のいちじく収穫量は川西市が神戸市に次いで第2位です。

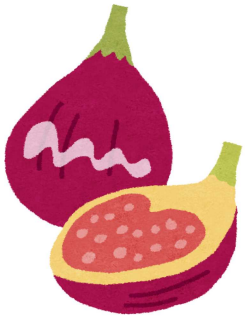
そんな川西市ですが、実はいちじく発祥の地なのです。
国内で販売されている品種の約8割が「桝井ドーフィン」という品種で、桝井ドーフィンが初めて栽培された地が川西市であると言われています。
その歴史は、明治42年広島県の苗業者だった桝井光次郎（ますいみつじろう）氏がアメリカから帰国する際、北米原産ドーフィン種の苗木を持ち帰ったところから始まります。
栽培研究の末、当時川西の猪名川（いながわ）流域の良好な土壌を活かし、桃やミカンの栽培が盛んであることに注目し、川西市に住んでいた前川友吉氏と当地での栽培に成功、桝井ドーフィンという新品種を作り出し、神戸、和歌山や愛知へと栽培が広がりました。

桝井ドーフィンは栽培しやすいという特性があり瞬（またた）く間に全国へ広がっていったそうです。

又、現在各地の店舗に並ぶ川西産のいちじくは一番おいしい状態で食べていただく為、農家の方が完熟のものを早朝から収穫し、市場に出荷されます。
これが川西いちじくの最大の特徴で、阪神間の大消費地が近いことと、一番美味しいいちじくを食べてもらおうと、毎日早朝から収穫する農家さんの努力により支えられています。
そんな川西いちじくの愛称は「朝採りの恵み」とのこと。
完熟で美味しいと定評があり、パティスリー エス コヤマのシェフ、小山氏もコンフィチュール（ジャムの一種）を作る際は川西産を使用しているそうです。

ちなみに、美味しいいちじくを選ぶポイントは、ぽってりと丸みがあり、付け根切り口付近まで色付いている物、表面の皮に張りがあり傷がない物だそうです。

いちじく収穫時期、外出帰りに川西池田駅に降り立つと、いちじく畑から甘い香りがファ～っと広がりとても幸せな気持ちになります。
毎年8月には川西特産いちじく品評即売会もありとてもお勧めです。是非いらして下さい。



木村 謹治

対面リーディングの実際 35

― ハンセン病と視覚障害者 ―

国が続けたハンセン病患者の隔離政策によって家族も長年差別を受けたとして家族らが国に損害賠償を求めた訴訟で、2019年6月28日の熊本地裁判決は国に家族にも賠償を命じました。国は判決を受け入れ、控訴しないと表明して、勝訴が確定しました。

しかしながら、国は熊本地裁判決が認めた国の責任に関して法律上の問題点があると政府声明で指摘し、閣僚の責任、国会議員の責任―などについて判決に対し反論するなど問題点をかかえています。

人生台無し 国は償え

ハンセン病家族訴訟勝訴に歓声

人権規定の明記へ意欲

差別一掃 スタートの日

さてハンセン病は、らい菌という細菌によって引き起こされる慢性の感染症です。古くから「らい病」とか「らい」といわれていましたが、らい菌を発見したノルウェーのハンセンの名をとって現在はハンセン病と呼ばれています。主に末梢神経と皮膚が侵され、感覚異常、皮膚のただれ、視力障害等の病的症状が現われます。

ハンセン病の感染力・発病力は極めて弱く、そのことは最初に法律を制定した1907年（明治40年）当時から判っていたことです。当時の帝国議会貴族院での政府委員の答弁でもそのことを認めています。

1956年（昭和31年）に行われ、我が国政府も参加した「らい患者の救済と社会復帰のための国際会議」では、全ての差別的法律の撤廃、在宅医療の推進、早期治療の必要性、社会復帰援助等をうたったローマ宣言が採択されました。

1958年（昭和33年）東京で開催された「第七回国際らい学会議」では、強制隔離政策を採用している国がその政策を全面的に破棄するよう推奨されました。このように国際的にはハンセン病を特別視しない医療政策の必要性が次々と強調されたのです。

しかし我が国では、20世紀を通じ一貫して絶対的終身強制隔離・患者撲滅政策がとられ続けてきたのです。医学的にも公衆衛生学的にも誤った政策でした。

各県の衛生当局と警察は「無らい県運動」の下に「刈り込み」と称して、しらみつぶしに患者を探し出し、療養所に送りこんだのです。

検診刈込風景

療養所への患者送り込みは「お召し列車」と呼ばれる特別列車が使われました。このような国の政策によって、患者は行動、住居、職業選択、学問、結婚の自由などありとあらゆる人間としての権利を奪われたのです。強制収容や消毒のやり方は、患者や家族の人権に全く配慮しない、見せしめ的な形で行われました。そのことで周囲の恐怖心をあおり、患者家族への社会的差別を決定づけました。多くの患者は、家族に差別が及ばないようにとの配慮から、強制隔離後も自らの存

在をひた隠しにするようになりました。死んだことになっている患者も少なくありません。

現在でも多くの患者が帰る故郷を失い、肉親との再会を果たせずにいます。

こうしてハンセン病患者は、社会に害毒を巻き散らす危険な存在というレッテルを貼られ、その後長年にわたり家族を含めて激しい社会的差別に遭うことになりました。

強制隔離された施設はといえば、「療養所」とは名ばかりで、およそ療養する環境にはありませんでした。強制収容所そのものでした。当初医療らしい医療はほとんど与えられませんでした。

それどころか、過酷な労働と劣悪な栄養状態の結果、ハンセン病はむしろ悪化し、その後遺症に苦しむことになりました。患者作業と呼ばれる強制労働は、わずかな小遣銭程度で戦後も続きました。

戦後、日本国憲法が制定され、基本的人権の永久不可侵がうたわれました。それにもかかわらず、「癩(らい)予防法」は存続し続けることになります。[※1]

『出来上がった畝(うね)を見下ろし、くわに手を置いて一息入れていた時だった。突然、背後から男性職員２人に羽交い締めにされ引きずり出された。必死にもがく男性を押さえ、職員は耳元で言い放った。「おまえの番だ」。連れて行かれた場所は手術室だった。手術台に寝かされた男性はふんどしを看護婦にはぎ取られた。指で性器をぱちぱちとはじく看護婦の顔には薄笑いが浮かんでいた。』と沖縄新聞にハンセン病療養施設「沖縄愛楽園」での強制断種の様子が記載されています。

女性が妊娠すると、愛楽園の医師らが堕胎させようと注射をおなかに打ったが、赤ちゃんは生きたまま母胎から産まれた。だが、看護婦は赤ちゃんを体重計の皿に置き、そのまま放置した。赤ちゃんは母親を求めるかのように、小さな手足を懸命にばたつかせた。しかし、誰も手を差し伸べず、赤ちゃんはやがて動かなくなった。「治療されてたら今も生きている命だ」。見殺しにされた赤ちゃんを思い、金城さんの涙は今も止まらない。

また、９歳だった頃、金城さんは愛楽園内の小屋に偶然入った。普段は施錠され、試験室と呼ばれる場所だった。内部は薄暗い。目を凝らすと、壁際の棚には複数のガラス瓶が置かれていた。中に入っているのは、人間だということが少女の目でも分かった。瓶の高さは30センチほど。胎児だけでなく大人の大きさの手、内臓のようなものまで、それぞれの瓶に入っていた。「こんなことが許された。まるで動物だ」。その衝撃は金城さんの中で怒りに変わった。[※2]

古くから「不治の病」として恐れられたハンセン病が、「確実に治る病気」になったのは、1980年代のことでした。3種類の薬を組み合わせて服用するMDT（多剤併用療法）が確立したのです。さらに、治療効果の研究が進んだ1990年代後半以降は、服用後、半年から1年で完治するようになりました。

もちろんそれ以前にも、さまざまな治療法が試されてきました。1940年代初頭まで主流だったのは、ダイフウシという木の種子から取った「大風子油」の注射です。この注射はとても痛いうえに、あまり効き目がなかったようです。

1943年にアメリカで、後のMDTにつながる大きな発見がありました。結核治療のために研究されていた新薬「プロミン」が、ハンセン病にも効果があることがわかったのです。結核のもとになる結核菌と、ハンセン病を引き起こす「らい菌」は、同じ属に分類される細菌です。これに目をつけたアメリカの国立ハンセン病療養所の医師が、希望する患者に投与したところ劇的な成果を上げました。このエピソードは世界中の注目を集め、療養所の名前を取って「カーヴィルの奇跡」と呼ばれたほどです。[※3]

米国で開発された特効薬「プロミン」による治療を長島愛生園で施した故・犀川(さいかわ)一夫氏の著書「ハンセン病医療ひとすじ」（岩波書店）によると、1946年秋ごろから日本製プロミンによる試験治療を開始、医局に「化学療法科」が新設され、消毒設備のある広い注射室ができ、毎日１千人近い患者の静脈注射が可能になりました。

犀川氏は著書で「皮膚の結節が自潰(じかい)してできる慢性潰瘍や鼻道の閉塞、咽喉頭(いんこうとう)の狭窄などによる呼吸困難の症状が日をおって軽快し……」と劇的な効果があったことを記しています。

1960年６月から約１年にわたり読売新聞に連載された松本清張の代表作である『砂の器』は推理小説であるとともにハンセン病を扱った小説でもあります。この作品には「業病」という言葉が頻出しています。

癩病を発病することは少なからぬ罪悪を犯すことと同義とされ、もし一人でも親族に発病者が出ると、その家は共同体の中で一切の関係性を断絶され、時には一家離散に追い込まれたという。そのような患者迫害が最も激しかった時期を背景に描かれています。主人公の和賀英良(わがえいりょう)は自分の過去を隠す目的で殺人を犯してしまうのです。

北條民雄(ほうじょうたみお)の『いのちの初夜』が発表されたのは1936年（昭和11年）。ハンセン病に対する差別が今よりもひどく、患者が書いた原稿に触れると感染すると言われた時代でした。にもかかわらず、北條民雄の才能に惚れ込んだ川端康成は原稿の管理から雑誌の掲載に至るまで、あらゆる面倒をみました。川端は「らい菌の感染力は極めて弱い」ことを知っていたのです。しかし文壇にデビューする際は、北條や家族が差別を受けないよう一切のプロフィールを伏せました。“北條民雄”という名前もペンネーム。（本名が公表されたのは2014年）『いのちの初夜』が芥川賞候補になった時も、川端は選考委員でしたがこの作品に票を入れませんでした。受賞すると北條の出自が白日の下に晒されるからです。

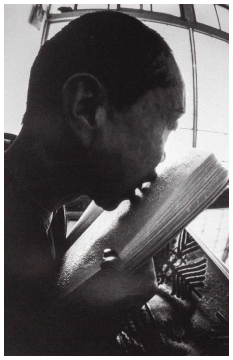
「いのちの初夜」は、ハンセン病の診断を受け、療養施設に入所してからの1週間に起きた出来事や、感じたことを、手記風にまとめた私小説です。作品の冒頭でその施設を、「東京から20マイルそこそこの」と記述してあり、彼が入所した東京府北多摩郡東村山村の全生園とほぼ一致することから、彼の実体験がかなりの比重を占めているものと思われます。

現在、角川文庫で発売されている同名の本には、そのほかに「眼帯記」、「癩院受胎」、「癩院記録」、「続癩院記録」、「癩家族」、「望郷歌」、「吹雪の産声」の7作が収められていますが、いずれも癩の隔離施設が舞台になっている短編小説です。

ハンセン病は主に皮膚と神経に症状が現れます。皮膚には斑紋や結節が生じ、末梢神経へのらい菌の感染により、末梢神経麻痺が起こり障害が生じます。治療しない場合は皮膚、神経、四肢、眼などへの障害が起こります。

1900年代後半、ハンセン病の療養所の入所者の中には視覚障害者が全体の１割ほどいたと言われています。

ハンセン病の症状によくみられるのは、手足の変形・欠損です。つまり両手が不自由で更に視覚障害ですと、自立する生活が困難でした。手の指が欠損すると手先で点字を読み取ることが出来ません。また、なえた手に道具を縛り付けて点字を打たなければなりません。そんな中で血の滲むような努力をして舌先で点字を読むことを習得していた入所者もいました。舌で読む「舌読(ぜつどく)」を繰り返すと舌が切れて出血することも多かったといいます。



日本では、北條のみならず数多くの患者が文学を志しました。多くの療養所で、俳句や短歌、小説の同人誌を作っていました。本に何度も舌をこすりつけ、口の中が血まみれになってもなお、言葉を欲したのです。家族から棄てられ、社会とのつながりも一切絶たれ、生きている意味を見出せない。そうした恐怖や不安の中、多くの患者が文学にすがりついたのです。

瀬戸内市の国立療養所邑久光明園（おくこうみょうえん）に、当時百数十人いたという視覚障害者らで作る「邑久光明園杖の友会」（現・盲人会）が1954年、季刊で発行を始めた『白杖』は、主に随筆、短歌、俳句などの文芸作品を収録し、入所者以外には国内の別の療養所や視覚障害者団体などごく一部に送られていました。

創刊号～５号に収録された短歌には

「妹の幸せなれと名を秘して一人静の咲く島に病む」

「銀貨一つ父にもらひて喜びしか永遠の別れとなりし幼な日」

「舌の先に読む点訳の楽譜書の陽の匂ひせり木陰に入りて」

が掲載されています。

『愛生』18巻9号（1964年12月）に長島愛生園の吉成稔さんが以下のように書かれています。指が麻痺していたので舌先で読む練習をしました。舌先から脳に文字が伝達されるようになって歓喜したそうです。思いがけぬ方法で文字を獲得し、自らの力で読書が出来るようになりました。そして読書意欲は堰を切ったように増大したそうです。

ところが肝心の点字図書が皆無と言っていいような状態だったのです。

そこで盲人会は1955年ごろ、日本点字図書館へ点字図書の貸し出しを求めました。しかし、日点からの返事はがっかりする内容でした。「社会通念が未だ癩患者に点字図書の貸し出しをゆるす迄に至っていない」とのことでした。

「ちぇ、俺たちに読まれたら病気がうつるとでもおもっているのかな、返す時は完全消毒するのに」

「さー、私はやはり因習的偏見からくる嫌悪感から貸さないのだとおもうわ」

「いや、反ってよかったよ、日点の図書はたくさんの盲人の指先が触れているから舌読の僕たちには不潔で非衛生的だよ」

とやりきれない思いが錯綜したそうです。

その後、日本ライトハウスから点字雑誌「黎明」と点字毎日から「リーダーズ・ダイジェスト」の古雑誌数百冊をもらい受け、また、奈良女子大点訳クラブは点訳の依頼も受け付けてくれ、点訳書の寄贈も続けていました。

その後テープ図書が出現し視覚障害者の読書環境が広がりました。1960年頃日点から「文藝春秋」の抜粋が寄贈されるようになりました。が、日点からのテープ図書の貸し出しは、またもや「現状から言っても、建前から言っても、お貸しするのが当然だが、社会通念がまだそれを許さず、一般読者の誤解を招いてはいけないので、今のところハンセン病の方にはお貸しできない」との返事でした。

貸し出しを拒否する理由が医学的見地からではなく、因習的偏見から来ているのだと知り、心の底から湧いてくる静かな憤りを抑えることができなかったと記しておられます。

日点から寄贈されるテープはあるのだが、図書の選択は日点側にあり、自分の自由意志で読みたい本を選ぶことが出来ません。

一般読者が誤解するなら、なぜその誤解を正して理解させようとしないのか！

点字図書館は名古屋や大阪など何ヵ所にもあります。そこで日本ライトハウスにテープ図書の貸し出しを申し出ました。折り返し返書と貸出規定、利用者カードが送られてきました。利用者カードには氏名・生年月日・現住所・職業・本籍・保証人など書き込む欄があったそうです。テープ図書が借りられる嬉しさに小躍りをしたそうです。[※4]

今では早期診断とMDT治療をおこなうことで、ハンセン病は後遺障がいをまったく残さずに治癒することが可能となりました。

現在むしろ問題となっているのは、偏見や差別を恐れて診断を受けることが遅れたり、治療を中断したりすることです。治療の中断によって症状が悪化すると、神経が侵されて知覚麻痺になったり、筋力が失われるなど、身体的な障害につながります。

また、私たちが肝に銘じなけらばならないのは、無知に基づく差別や偏見を決して繰り返さないことです。

［※１］ハンセン病国賠弁護団
［※２］沖縄新聞
［※３］ハンセン病制圧活動サイト
［※４］ハンセン病文学全集第5巻

寄り道・回り道

レポーター：木村（きむら） 謹治（きんじ）

虎連坊（とられんぼう） ヒルトンプラザウエスト店

【所在地】　大阪市北区梅田2-2-2　ヒルトンプラザウエストB2F
【電話番号】　06-6345-0855
【行き方】　大阪メトロ四つ橋線 西梅田駅下車 徒歩３分
【営業時間】　ランチ：11:00～15:00　／　ディナー　17:00～23:00
【定休日】　不定休
【URL】　https://www.dynac-japan.com/shop/torarenbou/hiltonplaza_west/

ヒルトンプラザはイーストとウエストがありますが、こちらの店はウエストにあり、ヒルトンホテルの道路を挟んで向かい側にあります。このビルの10階には「西梅田献血ルーム」があり、足繁く通っていました。

店内は重厚で伝統的な日本家屋の造りを基本としたモダンな雰囲気。内装はイメージどおり、少し高級感があり、カウンターやテーブル、個室など、おひとりさまから大人数（約50人）の宴会でもOKです。

定食のメインは数種類の中から選ぶことができます。秋刀魚と茄子の揚げだし・牛すき煮豆腐の２種は1,000円、和風ローストビーフサラダ・ハンバーグと蟹クリームコロッケの茸デミグラスソースの２種は1,080円、鰻と白葱の玉子とじは1,200円、刺身5種盛り合わせは1,300円です。

いずれも「鯛めし」と味噌汁が付き、おかわり自由で、運が良ければお焦げにあたることもあります。

僕が食べたのは牛すき煮豆腐。食べ放題の「鯛めし」が付いて、牛すき煮豆腐／チキン南蛮／小鉢／茶碗蒸し／味噌汁／漬物／胡麻プリンが付いていました。

鯛めしの米は京都丹後産コシヒカリ、水は軟水を使用し、鯛出汁と昆布出汁で炊いているそうです。

牛すき煮豆腐は割り下で香ばしく焼き上げた黒毛和牛とじっくり煮込んだ豆腐の、虎連坊こだわりのすき焼きで、山芋とろろでまろやかに仕上げた自慢の一品で、その上に温泉卵がのせてありました。

チキン南蛮は上にはタルタルソースがかかっており、茶碗蒸しは薄味で上品な味でした。

食後に気がついたのですが、300円追加すると鯛茶漬けセットがいただけます。特製の胡麻ダレに漬け込んだ鯛の刺身を鯛めしの上にのせて、鯛出汁を注いで食べると…想像するだけでわくわくします。早く気がつけば良かったのに本当に残念だったです。

皆さんはぜひ、鯛茶漬けセットも一緒に頼んでください。

便利な漢字検索アプリのご紹介

サービス部　対面担当　　福田（ふくだ） 直樹（なおき）

読み方が分からない漢字が出てきた時、辞書を引こうにもなかなか目的の文字が探せないことはよくあります。

今回は手書き入力でさっと漢字の読み方が調べられるスマートフォンの無料アプリをご紹介します。3点ともiPhoneでもアンドロイドの端末でも利用出来ます。同じアプリの有料版もありますので、インストールの際はご注意ください。

・常用漢字筆順辞典FREE

（iOS版名は常用漢字筆順辞典【広告付き】）

アプリを立ち上げると手書き入力の画面が開きます。ここで指などで目的の字を書き込んでいくと画面上部に漢字の候補が表示されます。目当ての漢字をタップしたら見やすい大きな活字と読み方が表示されます。

また、この画面で「筆順」をタップするとアニメーションで筆順が表示されます。「詳細」をタップすれば画数、部首、熟語の例も見ることができます。

見やすい大きな表示なので、漢字一文字を調べるにはとても便利だと思います。

・漢字読み方　漢字検索-手書き漢字辞典

こちらも立ち上げると手書き入力の画面が開きます。文字を書き込んでいくと、画面下方に漢字の候補が表示されます。目当ての漢字をタップしたら読み方が表示されます。

こちらは大きな表示にはなりませんが、今度は画面下方に今調べた文字を使った熟語が表示されます。目当ての熟語をタップすれば熟語の読み方が表示されます。

また、漢字を続けて入力して熟語の読みを調べることもできるのが特徴です。

・ど忘れ漢字クイズ（手書き漢字＆漢字読み方）

これは辞書ではありませんが、息抜きがてら漢字の復習が出来るゲームアプリです。

初級・中級・上級の「読み」「書き」が各100問、合計600問用意されています。書き問題は画面に手書きで、読み問題は画面上に表示される文字から1文字ずつ選ぶことで解答します。

出題は基本的にランダムですが、問題数がやや少なめなので何度も同じ問題に出くわすこともあります。

また、他のアプリへのリンクボタンもありますので、画面をよく見て操作して下さい。

脱力系の猫のイラストもいい感じです。

今回ご紹介したアプリはすべてGoogle PlayとApp Storeで入手可能です。興味のある方は試してみてはいかがでしょうか。

※今回ご紹介したアプリはいずれも無料版のため、広告が表示されます。音が出る場合もありますので、気になる方は音量をゼロにするかイヤホンをご使用下さい。

なお、アプリ内の課金やアプリの使用による機器の不具合等については責任を負いかねます。必ずご自身の判断と責任の下でのご使用をお願いいたします。

暗所視支援眼鏡　日常生活用具の給付対象に

視力が徐々に低下する難病「網膜色素変性症」など視覚障害に対応する「暗所視支援眼鏡」を、熊本県天草市が全国で初めて日常生活用具の給付対象に指定した。申請を続けてきた県網膜色素変性症協会会長で患者の山本悟さん（５７）＝熊本市東区＝は、「この眼鏡があれば就学、就労が可能になる人は多い。給付対象とする自治体がもっと増えてほしい」と期待を込める。

暗所視支援眼鏡は、光学機器大手HOYA（東京）が手掛け、独自開発した小型カメラで捉えた景色を明るい映像として眼鏡のディスプレー上に投影する仕組み。薄暗い場所でも真昼のような明るさで対象をはっきり見ることができるという。この眼鏡には遮光効果もあり、付属のリモコンでディスプレーの映像の拡大、縮小、明るさの調整ができる。レンズは標準と広角があり、広角を使うことで視野も広げられる。

ただ、価格は39万５千円で、個人で購入するには負担が大きい。2013年施行の障害者総合支援法に定められた地域生活支援事業に基づき、市町村が日常生活用具の給付対象として認めれば補助が適用される。　（2019-09-13 熊本日日新聞）

スマート白杖

自身も視力がほぼないというトルコのエンジニア、クルサット・セイラン（Kursat Ceylan）さんが開発したのは、スマート白杖「WeWALK Smart Cane」。なんとセンサーで障害物を検知したり、スマホと連携してナビゲーションしてくれたりと、目の不自由な人が安心して歩くためのサポートをしてくれるのです。

超音波センサーが付いており、80～250センチの範囲にある高さ約160cmまでの障害物を検出して、近づくと振動で警告してくれます。

また、音声による道案内が利用できるようになるのも心強い。Bluetooth経由で「WeWALK Smart Cane」のモバイルアプリと連携すれば、白杖を通してスマホの操作が可能。グリップに搭載されたタッチパッドでコントロールする仕組みで、たとえばグーグルマップで音声で道案内してもらったり、音声アシスタントを呼び出したりできるんです。加えて、グーグルマップと音声アシスタント機能を統合させることで、周辺にどんな施設があるのか、どこにバス停があるのか、といったことも把握できるようになります。

ゆくゆくはライドシェアアプリや交通機関サービスなどとも連携するようにして、さらに利便性を高めたいとしています。

言語は英語とトルコ語に対応していますが、日本語対応が期待されます。「WeWALK Smart Cane」は、公式サイトにて499.00ドル（約5万4000円）で販売中。

（2019-09-16 TECHABLE）

カメラ映像を音声化するAI視覚支援デバイス

オーカムテクノロジーズはカメラ映像を音声化するウェアラブルデバイス「OrCam My Eye2（オーカムマイアイ2）」を開発。AI（人工知能）などの先端技術を取り入れ、障害を持つ人々のQOL（クオリティ・オブ・ライフ）を高めようという動きが注目されている。

外出時には駅や看板などの情報を確認することも出来る。Bluetooth対応の補聴器やイヤホンに接続できるため、周囲の人に音声を聞かれることもない。100円ライター程度の大きさで、眼鏡に装着して使用する。重量は22.5gと軽量だ。本体価格は60万円、文字の読み上げ専用モデルは45万円（ともに非課税）。

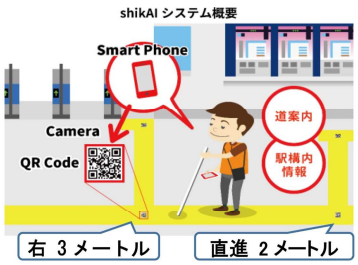
（2019-09-08 財経新聞）

地震地図、色覚障害に配慮

日本列島内の地震危険度を色で示す「全国地震動予測地図」を、全国で300万人以上といわれる色覚障害の人にも分かりやすく作り直すことを、発行する政府の地震調査研究推進本部が決めた。

地震本部は色覚障害者が見分けにくい緑と赤の混在を避けるため「緑色」の使用をやめ、見分けやすい9色のうちから選んで使う。（2019-08-24 日本経済新聞）

駅ナビシステム「shikAI」の実証実験



このシステムは「shikAI」（しかい）と呼ばれ、日本語の「視界」と、人工知能（AI）とを掛け合わせて命名されました。

shikAIは、駅構内の点字ブロック上に貼られたQRコードを、専用アプリ内から起動したスマートフォンのカメラで認識。「改札です。直進4メートル」など、進む方向や距離を音声で細かく伝え、利用者を目的の場所まで案内します。

「改札」「券売機」など、どこに行きたいかは、スマホの画面をタップすることで音声が流れるので、それを元に選択することができます。手元スマホから足元のQRコードまで距離があり、しかも設置されているのは床面ということで汚れなどによる読み取り不具合が気になるのですが、「QRコードは30%ほどの欠損があっても読み取りに不具合がない」とのことで、実際に使ってみると、スムーズにQRコードを読みこむ様子を実感できた。また、各ドア位置にQRコードがあるので自分の好みの車両、位置に乗車できる。

誘導用ブロックと白杖だけでは、行き先を明確に把握することが難しく、特に不慣れな駅では迷いやすく不安に感じている利用客が多い。

実証実験に協力した高橋史月さんは、アプリを使った感想について、「分かりやすいです。リピート機能があるので、ちょっと（進む方向が）違ったかな、と思ってもやり直せるのが良い」、松尾政輝さんは「本当にありがたいことだと思います。こういうサービスがもっと広がっていってもらえれば良いと思います」と話しました。（2019-09-06）

Q&A

【前回のお悩み】

・難しい言葉の説明はどの程度すればいいでしょうか？

多かったお答えは「相手に質問されれば調べてお答えする」というものでした。資料の種類によって、小説なら聞かれなければそのまま、提出する書類などでは必要を感じた部分があれば説明する、という方もおられました。

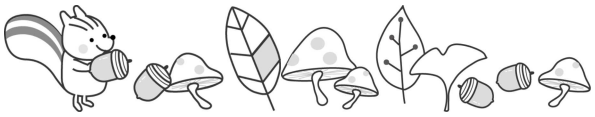
説明については「漢字を説明する」「辞書で確認する」など、皆さんその時々に適した方法を工夫されている様子でした。

利用者も様々で、多少分からなくてもどんどん読んでほしいという方も、詳しく意味を知りたい方もおられます。利用者の希望を確認しながら、それに添って読み進めていただくことが基本になるのではないでしょうか。

【今回のお悩み】

・図書を途中から読む時、人名などの固有名詞の読み方が分からず困っています。

おしらせ



・「日本ライトハウス展～全国ロービジョンフェア2019」を開催します。

毎年恒例「日本ライトハウス展～全国ロービジョンフェア2019」を10月19日（土）、20日（日）に開催します。会場は難波御堂筋ホール７階と8階、入場無料で時間は両日とも10時から16時です。

特別ステージには理化学研究所の仲泊聡氏、石川県しらお眼科の橋本伸子氏、iPhoneパワーユーザーの品川博之氏やUDCast開発者の川野浩二氏らが出演します。

もちろん、会場では様々な最新機器や便利グッズをご覧いただくことも出来ますので、ぜひご来場下さい。

また、当日会場内で来場者のガイドをしていただくボランティアスタッフも募集中です。ご参加いただける方は対面担当または3階総務係までお申し出下さい。

・悪天候時などの連絡について

台風などの悪天候時に、当館では活動休止の規定を定めています。ただ、警報が発令されていなくても局地的な大雨や交通機関の停止など、来館に危険がある場合は無理をしないようにお願い致します。また、通常時でも様々な理由で到着が遅れる場合もあるかと思います。その場合も可能な限り、担当まで早めにご連絡をお願い致します。

ラグビーワールドカップがいよいよ開幕しました。馴染みが薄い競技かも知れませんが簡単なルールを幾つか覚えるだけでグッと面白くなります。熱戦に期待です。（F）

日本ライトハウス 情報文化センター
550-0002 大阪市西区江戸堀1-13-2
06-6136-7704（対面専用）
06-6441-0039（サービス部）